A 03 インドネシア・スラバヤ市におけるネッタイシマカ腹部斑紋の季節変異

○津田良夫¹、Subagyo Yotopranoto²、Srisbekti Bendryman²、都野展子¹、Yoes Priatha Dachlan²、高木正洋¹（¹長崎大・熱研・生物環境、²TDRC, Airlangga Univ., Indonesia）

Seasonal Changes in Variation of Dorsal Scale Pattern of *Aedes aegypti* in Surabaya, Indonesia

Tsuda, Y., Yotopranoto, S., Bendryman, S., Tuno, N. and Takagi, M.

2000年3、4、5、7、8、10月にインドネシア・スラバヤ市の住宅地で屋内外にそれぞれ20個のovi-trapを設置して、そこに発生するネッタイシマカの幼虫を採集した。採集した幼虫を実験室で飼育・羽化させて、成虫の腹部斑紋を調べた。年間を通じて腹部第7節にまで白色鱗粉が散在する白っぽい個体の割合がかなり高いことがわかった。腹部斑紋の変異は季節的に変化し、雨期になると黒っぽい個体が多くなる傾向が見られた。また、屋内外の違いは統計的に有意で、白っぽい個体の割合は屋内に設置したovi-trapの方が屋外に設置したovi-trapよりも高かった。3月に得られた集団を用いて行った白系統および黒系統の人為選抜結果について合わせて報告する。

A 04 ネッタイシマカ成虫腹部に見られる斑紋変異とグリコーゲン・中性脂肪量との関係

Tran Vu Phong・Vu Sinh Nam（ベトナム国NIHE・昆虫）、○沢辺京子・朝永千春・金澤保（産業医大・寄生虫学熱帯医学）、津田良夫・高木正洋（長大熱研・生物環境）

The relationships between glycogen and neutral lipid contents, and variation of dorsal pattern of *Aedes aegypti*

Phong T.V., Nam V.S., Sawabe K., Tomonaga T., Kanazawa T., Tsuda Y. and Takagi M.

ネッタイシマカ成虫の腹部には形態変異の一つである斑紋変異が知られており、McClelland (1974) は腹部各節にある白帯の累積面積を15段階で評価している。この斑紋変異と蚊のデング熱ウイルスに対する感受性や殺虫剤抵抗性との関連性は以前から指摘されているところである。本大会ではまず、エネルギー源としてのグリコーゲンおよび中性脂肪の量を比較し、斑紋変異の生理的な意味を考察した。ベトナム国内数ヶ所で採集したネッタイシマカ個体群では、腹部斑紋の白色度が低い（黒色度の高い）群ほど、オスでは中性脂肪量が、メスではグリコーゲンの含有量が多かった。黒い個体ほどこれらエネルギー源を有効に利用していることが推察された。そこで次に白色および黒色度の高い個体をそれぞれ数世代に渡り選抜し、個体レベルでの相関を見たので併せて報告する。